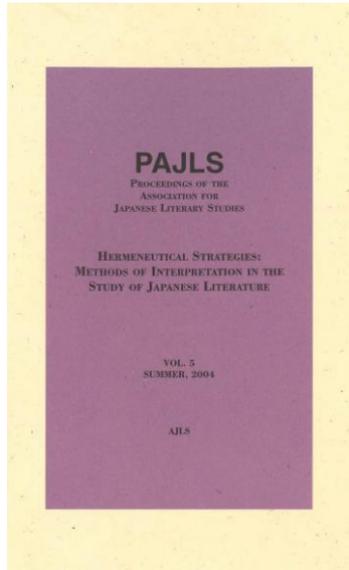


「西田幾多郎の哲学と日本語」
Nishida Kitarō's Philosophy and Japanese Language

Fujita Masakatsu 藤田正勝

*Proceedings of the Association for Japanese
Literary Studies* 5 (2004): 459–469.



PAJLS 5:
*Hermeneutical Strategies: Methods of Interpretation in the
Study of Japanese Literature.*
Ed. Michael F. Marra.

西田幾多郎の哲学と日本語
NISHIDA KITARŌ'S PHILOSOPHY AND JAPANESE
LANGUAGE

藤田 正勝
Fujita Masakatsu

1

哲学者の文章は一般に難解であると言われますが、日本の哲学者の書くものに対しても晦渋で分かりにくいという批判がしばしばなされます。小林秀雄もかつてある座談会の席で、日本の哲学者の書くものが非常に難解であり、そこに「日本人の言葉としての肉感」が感じられないと語ったことがあります。「肉感」という言葉で小林が何を言い表そうとしたのか明確ではありませんが、そのことと関わって小林は次のようにも述べています。「国語で物を書かねばならんと云ふ宿命に対して、哲学者達は実に無関心であるといふ風に僕等には感じられるのです。如何に誠実に、如何に論理的に表現しても、言葉が伝統的な日本の言葉である以上、文章のスタイルの中に、日本人でなければ出て来ない味ひが現はれて来なければならんと思ふ」〔1〕。

小林は「スタイル」、あるいは文章の「味ひ」という言い方をしており、単に表現上の問題だけが言われているようにも受け取れますが、しかし彼の批判は、それ以上の事柄にもつながっているように思われます。つまり、日本語で思索するということが——それは小林の表現を使えば、日本人にとっては「宿命」であります——哲学にとっていったいどのような意味をもつのか、という問題につながっているように思われます。そうであるとする、小林の批判は、哲学をする人がそうした問題に無関心であり、無自覚であるという批判として受け取ることができます。

もちろん哲学は普遍的な性格をもちます。どこにいるか、どこで思索するかということは哲学的な思索にとって問題ではありません。しかし、思索は私たちがふだん話す言語に、つまり自然言語に依存しています。そしてそれぞれの言語において、一つ一つのことがば

指し示すものは同じではありません。たとえば「木」ということばと、“tree”や“Baum”ということばが指し示す内容とは同じではありません。「主観」や“subject”, “Subjekt”といった学術用語でもそうです。おそらくその違いは前者よりもはるかに大きいでしょう。そうしたズレの集積の上にわれわれの思索は成り立っています。そうであるとすれば、それぞれの思索に、それぞれの言語の特徴、あるいはそれぞれの言語が前提にする特殊な〈ものの見方〉が影響を与えないではおかないと考えられます。

何を問題にするか、そしてそれについてどのように考え、どのように答えを導きだしていくかということに、日本語で思索することが大きく関わっているように思われるのです。この事態を逆の方向から眺めると、自ずから、日本語で思索することが哲学という営みにどのような意味をもつのかという問いにつながっていきます。そのような問いに日本の哲学者がまったく無関心であるということ——それは日本語で思索することに固有の制限に対して無関心であるということでもありますし、日本語を用いるが故に問うるものがあるのではないかという問題に無関心であるということでもあります——を小林秀雄は指摘しようとしたように私には思われます。

2

そのような問題に日本の哲学者がまったく無関心であったとは、もちろん言えません。たとえば九鬼周造は、『いきの構造』のなかで、日本人の性情や歴史、文化を色濃く映した言葉、とくに「いき」という言葉に注目しています。九鬼がその言葉を問題にしたのは、彼が言語をどのようなものとしてとらえていたかということに深く関わっています。九鬼は言語、あるいは意味を、それを使う「一民族の過去および現在の存在様態の自己表明」〔2〕として理解しています。つまり蓄積された民族の文化の自己開示としてとらえています。したがって言語ないし意味と、「民族の意識的存在」との関係は、前者が後者を形成するのではなく、逆に、後者が前者を生みだす、と九鬼は考えます。別の言い方をしますと、部分がまずあって、それが全体を構成するのではなく、全体が一つ一つの意味内容を規定していく、というように九鬼は考えます。したがって、彼によれば、言葉の一つ一つが、それを使用する民族の存在あるい

は文化の表明として、特殊な色合いを帯びていると考えられます。もちろんそのなかには、普遍性の強い、つまり対応する言葉を他の言語の中に容易に見出すことのできる言葉もあります。しかし逆に、特殊性の強い、つまり他の言語に対応するものを簡単には見いだすことのできない（しかもその民族の存在様態を開示するものとしてきわめて重要な）言葉が存在します。そのような例として九鬼は、フランス語の“*esprit*”や、ドイツ語の“*Sehnsucht*”を挙げています。日本語の「いき」も、九鬼によれば、そのような言葉の代表例でありました。このように九鬼は、日本語、あるいは「意識的存在」としての日本人に対して強い関心をもっていました。しかし彼も、日本語で思索するということが哲学にとってどのような意味をもつのかという問題を直接考察の対象にはしませんでした。

3

西田幾多郎についても、いま述べた問題に自覚的であったかどうか、言いかえれば、日本語で思索するという「宿命」を一つの問題として自覚的に問うことをしたかどうかと問うならば、おそらく「否」と答えざるをえないと思います。彼の著作のなかで直接日本語の問題に触れているところは、ほとんどありません。例外的には、たとえば「国語の自在性」（『続思索と体験』所収）と題されたエッセーのなかで西田は次のように述べています。「日本語は何に適するか。……一例を云へば、俳句といふ如きものは、……日本語によつてのみ表現し得る美であり、大きく云へば日本人の人生観、世界観の特色を示して居るとも云へる。日本人の物の見方考え方の特色は、現実の中に無限を掴むにあるのである」〔3〕。この文章自体は、日本人のものの見方・考え方を西田がどのように考えていたかを知る上でたいへん興味深いものですが、しかし、そこでは、日本語を用いるということが哲学的な思索にとってどのような意味をもつのか、ということは論じられていません。

しかし西田の場合、注目する必要があるのは、直接その問いを問うていないとしても、しかし大きな意味では、日本語を通して思索するという事態に注目し、その意味を問題にした、と言えると思われる点です。この点について以下で考えてみたいと思います。つまり、日本語で思索するということが哲学にとってどのような意味をもつのかという観点から西田の思想を読み解いてみたい、つまり解釈してみたいというのが本発表の意図するところです。

手がかりとしてまず西田の弟子である下村寅太郎が書いた「西田哲学と日本語」という論文を取り上げてみたいと思います。そこで下村は次のように記しています。「われわれの話や文章には主語がない場合が非常に多い。しかしそれを主語の省略というのは、主語と述語を根本形式とする西洋の文法の立場からの解釈にすぎない。日本語で主語がない場合、必ずしもあるべき主語が省略されているのではなくて、主語と述語を根本形式としないということである。寧ろ主語の存在を必要としない、そういう言語が日本語の特色であるともいえる」〔4〕。

下村が主張するように「主語の存在を必要としない」とまで言えるかどうかはしばらく措くとしても、日本語は、〈主語＋述語〉という形を必ずしも根本の形式としていない、ということはいえるように思います。それに対してヨーロッパの諸言語の場合には、明らかに〈主語＋述語〉という形が、文の基本形をなしています。そして、おそらくそこには、対象の把握、あるいは対象の客観的な叙述という点に重点を置く、欧米の人たちの、ものに接する際の基本的な態度が反映しているように思われます。何よりもまず対象に注意を注ぎ、それを精確に表現する、という態度が根本にあるように思われます。つまり、〈主語＋述語〉という文章表現の形式は、単に文法上の問題ではなく、ものを見る、あるいはものと接する際の基本的な態度と密接に結びついていると考えられます。

そしてこの態度は、哲学の術語を用いて表現しますと、ものを〈実体 (substance)〉と〈属性 (attribute)〉との関係としてとらえるという〈ものの見方〉と結びついているように思われます。つまり、対象をとらえるにあたって、まず、諸性質から独立して〈自己同一〉を保つものを考え、そして、変化する諸性質がそれに帰属していると考えた考え方と結びついていると考えられます。そしてこの〈実体〉と〈属性〉との関係としてとらえられた事態が、実際に言語で表現されるとき、まず〈実体〉の方が〈主語〉として言い表され、〈属性〉の方が〈述語〉として言い表されます。つまり、まず、〈実体＝主語〉が基軸として設定され、そこから〈属性＝述語〉が展開されていく形をとります。ヨーロッパの諸言語の基本形式である〈主語＋述語〉形式は、このような背景をもつと考えられます。

4

以上を踏まえてもう一度日本語の特徴について考えてみますと、日本語の場合、事柄を〈実体〉と〈属性〉との関係に分けてしまうのではなく、それを一つのまとまった出来事としてとらえ、表現するという点にその特徴があると言えると思います。それは一面では、日本語が対象の厳密な分析に不向きであるということでもあります。

それに対してヨーロッパの諸言語の場合、〈主語＋述語〉というその構造から、つねに実体の諸性質を概念化する努力がなされます。またそれとともに、属性の実体への帰属関係の真偽がつねに問題にされます。そういう意味できわめて厳密な言語であると言うことができます。しかしそのことは、裏返して言いますと、ヨーロッパの諸言語は、厳密にしか表現できないということでもあります。〈主語（実体）は述語（属性）である〉という形式の上でしか表現できないからです。そのことのために表現——たとえば詩歌などの文学的表現——の幅が狭められるということが起こっているかもしれません。

先に、西田が、「国語の自在性」というエッセーのなかで、日本語は俳句のような詩歌表現に適している、と語っていることを紹介しました。このエッセーのなかで西田は、「自在性」という言葉で何を考えているかはつきり述べていませんが、もし日本語に「自在性」があるとするれば、おそらくそれは、〈主語（実体）は述語（属性）である〉という枠組みに限定されずに事柄を表現できるという日本語の特徴と深く関わっていると言えるであろうと思います。

しかし、西田がこのエッセーのなかで述べていることは、裏返してみますと、日本語は詩歌表現には向いているが、しかし論理的表現には、あるいは哲学には向いていない、ということでもあるように思います。西田も日本語にそういう面があることを認めていたのではないかと思います。しかし他方、〈主語（実体）は述語（属性）である〉という枠のなかで考える西洋の哲学には見えないものもある、そのようにも考えていたのではないかと思います。まさにそういう点を西田はその思索を通して見ようとしたのではないかと思います。

ここで詳しく論じることはできませんが、たとえば「純粹経験」ということを西田が言うとき、ねらいは、そういう点にあったと考えられます。まず主語という基軸を設定し、それに属性を帰属させるという仕方で事柄を分節化することは、たしかに意味あることで

あり、それが多くの成果をもたらしてきたことは疑いありませんが、しかし、それがそのまま、ものごとをその全体においてとらえることではない、と西田は考えていたように思うのです。むしろそうした分節化以前のところをこそとらえる必要があるのだという考えと、「純粹経験」をめぐる思索とは分かちがたく結びついていたと言えると思います。

5

次に日本語のもう一つ別の特徴について見てみたいと思います。先に申しましたように、ヨーロッパの諸言語では、実体＝主語が基軸として設定され、そこから事柄が把握され、表現されていきます。それと対比して言いますと、日本語では、話者の直接的な存在了解が実体・属性の関係に分節化されることなく、そのままの形で表出されます。それはおそらく、日本語では、存在が自己のうちでどのように受け取られたかという点に重点が置かれるからであろうと思います。自己のうちで受け取られたかぎりでの事柄が、さしあたって注意の向けられる対象であり、事柄が事柄として何であるか、それにどのような属性が帰属するか、といったことは第二次的に関心が向けられるにすぎません。つまり、対象の分析よりも、受け取り手の感情、あるいは評価の方に第一次的に注意が向けられるのです。

そのような話者の感動や評価は、具体的に品詞で言えば、「まさか」とか「せっかく」といった副詞や、「うまく行くまい」という文中の「まい」などの助動詞、「暑いな」、「暑いよ」、「暑いとも」などの、「な」、「よ」、「とも」といった助詞などで表現されます。そのような文法のレヴェルから、日本語のいま言った性格、つまり、話し手の感情や評価が言語活動に強く反映する言葉であるということに注目した国語学者として、時枝誠記（1900－67年）の名前を挙げるができます。

時枝によれば、文は、〈詞〉と〈辞〉とからなります。〈詞〉とは、名詞、動詞、形容詞、副詞など、具体的な事象をいったん概念化した語であります。それに対して〈辞〉は接続詞、感動詞、助動詞、助詞などであり、時枝によれば、概念化の過程を経していない、話者の感情や判断を直接的に伝える語であります。時枝の基本的な考え方は、〈詞〉を〈辞〉が包み込む形で、つまり、〈詞〉という客観的なものに、話者の気持ちを表現する〈辞〉がつけ加わって句が、そして文が成立する、というものです。〈詞〉と〈辞〉とは、

いわば引き出しとその引き手の関係にあります。ただし、引き手は単なる付属品ではなく、それで（つまり話者の感情や判断で）引き出し（つまり客観的な叙述内容）をそっと引き出したり、あるいは強く引き出したりするはたらきをします。その意味で引き手の方が支配的な役割を果たしていると言ってもよいわけです。そして一つの〈詞＋辞〉の基本単位は、別の〈詞＋辞〉によって、そしてそれがさらに別の〈詞＋辞〉によってというように、いわゆる〈入子型〉に順に包まれていきます。

そうすると日本語の文では、詞と辞とが交互に現れ、客観的な内容をもつ〈詞〉に対して、話者がどのような態度をとるかということが、そのつど言い表されていくこととなります。言いかえれば、客観的な叙述が、つねに話者の評価や感情に引き戻されながら、展開していくわけです。さきほど、日本語は詩歌に適しているという西田の説を紹介しましたが、もしそのように言えるとしますと、それは、このように〈辞〉を通して一つ一つの句に感情を込めることができるという日本語の構造と深く関わっていると思います。

時枝文法ではさらに〈格〉が問題にされます。〈格〉というのは、詞と詞との間の関係を言い表したものです。たとえば「犬が走る」という文を例に挙げますと、「犬」は、「走る」との関係において「主語格」であり、それに対して「走る」の方は「述語格」です。その他「客語格」、「修飾格」、「独立語格」などを時枝は挙げています。そのなかで時枝がもっとも重視するのが「述語格」です。述語格の〈辞〉のなかに、話者の最終的な感情や評価が言い表されるからです。

以上で見た時枝の理論を手がかりにしますと、日本語の特徴として次の二つの点を挙げるができると思います。一つは、日本語の文では、〈詞〉が〈辞〉によって包まれることによって、話し手の感情や評価が前面に押し出される構造になっているという点です。そしてもう一つは、日本語では「述語格」が、あるいは「述語格」の〈詞＋辞〉が文の中心をなしているという点、言いかえれば、そこに述語中心的な構造を見いだすことができるという点です。

6

このような日本語についての理解を下敷きにして、西田の〈場所〉の哲学について少し考えてみたいと思います。西田の〈場所〉についての考えは、『働くものから見るものへ』（1927年）の

なかの「場所」の論文において展開された後、『一般者の自覚的体系』（1930年）や『無の自覚的限定』（1932年）において、いっそう深められていきましたが、ここでは『働くものから見るものへ』の諸論文、とくに「場所」の論文を考察の手がかりとしたいと思います。そこでは、〈場所〉の問題がもっとも強く論理との関係において、したがってまた〈ことば〉の問題とのつながりにおいて論じられているからです。

西田の〈場所〉論は、もちろん、日本語をどのような言語としてとらえるか、というところから出てきたものではありません。〈場所〉論の背景には、カント、および当時の新カント派の哲学、とくにその認識論との対決がありました。カントないし新カント派の認識論は、主客の対立、つまり知るものと知られるものとの対立から出発し、その前提のうえに立って、認識がいかにか成り立つのか、ということ論じました。言いかえしますと、主観のはたらきを、まず、感性と悟性とに分け、そしてそれぞれの働きによって、どのようにして認識が可能になるのか、どのようにして対象が構成されるのか、ということ論じました。そこでは確かに対象化された主観、つまり「意識された意識」は明らかにされるかもしれないが、しかし「意識する意識」はとらえられない、というのが西田のカントないし新カント派に対する批判の要点でありました。逆に言いますと、この「意識する意識」をいかにして把握するかということが、この時期の西田にとっての最大の関心事であったわけです。

もちろんこの「意識する意識」は、西田において単に認識論的な関心からのみ問題にされていたわけではありません。「意識する意識」は西田において、同時に「真の自己」でもありました。つまり、認識、あるいは知の問題が、実存の問題、自己がいかなる自己であるかという問題と重ね合わせて考えられていたと言えます。

さて、この「意識する意識」ないし「真の自己」をいかにしてとらえるかという問題を追究する際に西田が手がかりにしたのが、アリストテレスのヒュポケイメノン（*hypokeimenon*）の考えでした。それは無数の属性を支える基体であり、主語にはなるが決して他のものの述語にはならないものでありました。西田はこのアリストテレスのヒュポケイメノンの考えについて、一方ではそれが自分の考えを論理化する手がかりになったことを認めながら、しかし同時に、それが「意識する意識」をとらえるためには必ずしも十分ではないことを述べています。そのような仕方考えられた基体は、どこま

でも「対象化」されたもの、一つの対象としてとらえられたものであるからです。

そのような反省の上に立って、西田はアリストテレスのヒュポケイメノンの考えを逆転します。西田によれば、判断とは、主語が述語に、特殊が一般に包まれることにほかなりません。この包摂関係から自己、あるいは意識を考えるとすれば、主語の方向にではなく、述語の方向に求めるほかはありません。主語の方向に求めれば、それを対象化してしまうことになるからです。そしてこの包摂の関係を述語の方向にどこまでもたどっていくとき、最後に、「述語にはなるが決して主語にはならないもの」に行きつきます。西田によればそれこそが〈意識する意識〉にほかなりません。それは主語とならないが故に、けっして対象化されません。したがってそれは点ではなく、むしろ円に喩えられます。それは物ではなく、〈場所〉です。無数の意識現象、判断がそこにおいて成立する無限な広がりです〔5〕。

もし「意識する意識」がそのようなものであるとしますと、それとの関係で、いわゆる知、すなわち〈知る〉ということをもどのように考えたらいいか、ということが問題になります。そのことを西田は、〈自覚〉ということから考えようとしています。「場所」の論文で西田は次のように述べています。「従来の認識論が主客対立の考から出立し、知るとは形式によつて質料を構成することであると考へる代りに、私は自己の中に自己を映すといふ自覚の考から出立して見たいと思ふ。自己の中に自己を映すことが知るといふことの根本的意義であると思ふ」〔6〕。それ自身はいっさい限定をもたないもの——つまり〈場所〉——が、自己のなかに自己を限定し、いわゆる意識を、つまり〈何かを意識するという事〉を可能にし、またそのような形で〈知〉を可能にすることが自覚である——このように西田は考えています。

このように西田が〈場所〉論を展開していくとき、そこに、上で見た日本語の構造との強いつながりを見ないわけにはいきません。まず、なぜ西田が「意識する意識」ないし「真の自己」を問題にしたのかということの問題にしたいと思います。先に、日本語の表現の場合には、感情の主体としての自己が当事者としてその場に臨み、その感動、評価を表現したり、聞き手に語りかけたりするという面が強く出ると言いました。〈辞〉を通して表現内容に自己を浸透させていく主体の関与によって、表現がはじめて進展していくのです。この主体を視野に入れることによって〈意識する〉という出来事が

全体としてとらえられる——このような理解が西田の思索の根底にあったと考えられます。そしてその自己は対象化され、分析されることによってとはとらえられないものでした。〈自覚〉という構造を考へることによってはじめてその主体は視野に入ってくるという考へが西田の〈場所〉論を支えていると言ってよいのではないかと私は考へています。

次いで、その「意識する意識」を西田が「述語の方向に求め」たということも、日本語の〈述語中心的構造〉に深く関わっていると思います。先に述べましたように、日本語の場合、文の基礎をなすのは述語です。そしてまさにその述語、とくにその〈辞〉に話者の感情や評価が表現されます。〈辞〉は、〈辞〉のなかに自己を浸透させていく主体に直接つながっています。その方向に西田が「意識する意識」、「真の自己」を求めたことは当然のことであつたと言へると思います。

さらに、西田が〈知〉の成立を〈自覚〉としてとらえたことも、日本語の構造に対応しているように思います。日本語の場合、先に述べたように、客観的な内容をもつ〈詞〉に対して、話者がどのような態度をとるかということが、そのつど〈辞〉として言い表されていきます。そのようにして話者が、文のなかに形をとっていくわけです。形なきものが一つ一つの句のなかに、一つ一つの文のなかに結晶していくのです。そのような事態と、西田の言う〈自覚〉とを、重ね合わせて理解することができると思います。

7

さて《日本語で思索するということは、哲学にとってどのような意味をもつのか》という問いが、最初に立てた問いでありました。その点にもう一度立ちかえって考へてみたいと思います。西田が〈場所〉論を通して主張しようとしたのは、〈主語（実体）は述語（属性）である〉という図式で意識ないし自己をとらえようとしても、対象化された限りでのそれしかとらえられないということでした。「意識する意識」あるいは「真の自己」をとらえるためには、それを〈場所〉、より正確には〈無の場所〉と考へるほかないというのが西田の主張でした。それは、〈主語（実体）は述語（属性）である〉という図式をあてはめるかぎり、覆われてしまう事柄があるということですが、まさにそのような事柄を西田が主題化したのは、西田が日本語で感じ、思考し、表現するという自己のあり方

に対して関心をもちつづけたからであると言えるのではないかと思います。〈日本語で思索する〉ということが哲学に対してもつ積極的な意味を、——先にも申しましたように、西田はそのことを直接論じたわけではありませんが——しかし結果的には、そのことを西田の思索は明らかにしているように思うのです。

註

〔1〕 1942年に行われた座談会「近代の超克」での発言。『近代の超克』（富山房、1979年）248頁。

〔2〕 『九鬼周造全集』（岩波書店、1980—82年）第1巻、8頁。

〔3〕 『西田幾多郎全集』（岩波書店、第3刷、1978—80年）第12巻、152頁。

〔4〕 下村寅太郎『西田幾多郎、人と思想』（東海大学出版会、1977年）254頁。

〔5〕 『西田幾多郎全集』第4巻、279頁。

〔6〕 『西田幾多郎全集』第4巻、215頁。